古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 237 号（2022 年 8 月）

満洲文字の文字表をめぐって(2)
―文字配列順、Windows フォント、位置による字形の異なり―

吉池孝一　中村雅之

文字の配列順

中村：初回は満洲語文語・満洲文字の研究に大きな影響を与えたメレンドルフ(1892)を検討しました[①]。満洲文字の文字表と満洲文字のローマ字表記を検討したわけですが、いわゆるメレンドルフ式のローマ字表記は、転写というよりも、実用性を加味したローマ字翻字と呼んだ方がふさわしいということでしたね。

吉池：メレンドルフの文字表は、縦横に満洲文字の様々な字形を配置するわけですが、条件によって変化する文字は省略されており、だいぶ簡略化された表でした。

中村：ところで、メレンドルフの文字表の文字の順番ですが、ローマ字翻字で示すと次のとおりです。なお、2 の中国語用文字の部分には複数のミスプリがあり修正が必要ということで前回の「満洲文字の文字表をめぐって(1)」で修正案を出しましたが、いまはメレンドルフに従いそのまま出します。

1. a, e, i, o, u, ū, n, k, g, h, b, p, s, š, t, d, l, m, c, j, y, r, f, w,
2. 中国語用文字　k', g', h', ts', ts, dz, ž, sy, c'y, jy
3. ng

このような順番は何によるものか気になるところです。

十二字頭とメレンドルフ

吉池：「十二字頭」と関連がありそうです。満洲文字には、満洲語の音節の構造によってその音節を 12 種類に分けるという伝統的な分類法があります。それを「十二字頭」と呼びます。いま『滿漢字清文啓蒙』(「雍正庚戌(1730)程明遠題」とある。拓殖大学蔵本）巻之一に掲載されている十二字頭の概略をメレンドルフ式のローマ字翻字で示すと次のとおりです。

第一字頭の中のすべての音節を挙げる

a, e, i, o, u, ū, na, ne, ni, no, nu, nū, ka, ga, ha, ko, go, ho, kū, gū, hū, ba, be, bi, bo, bu, bū, pa, pe, pi, po, pu, pū, sa, se, si, so, su, sū, ša, še, ši, šo, šu, šū, ta, da, te, de, ti, di, to, do, tu, du, la, le, li, lo, lu, lū, ma, me, mi, mo, mu, mū, ca, ce, ci, co, cu, cū, ja, je, ji, jo, ju, jū, ya, ye, yo, yu, yū, ke, ge, he, ki, gi, hi, ku, gu, hu, k'a, g'a, h'a, k'o, g'o, h'o, ra, re, ri, ro, ru, rū, fa, fe, fi,

---

① Möllendorff, Paul Georg von (1892) *A Manchu Grammar, with Analysed texts*, Shanghai.

fo, fu, fū, wa, we, tsa, tse, ts, tso, tsu, dza, dze, dz（母音の有無は要検討）, dzo, dzu, ža, že, ži, žo, žu, sy, cy, jy

第二字頭は ai, ……【以下略】……など

第三字頭は ar, ……【以下略】……

第四字頭は an, ……【以下略】……

第五字頭は ang, ……【以下略】……

第六字頭は ak, ……【以下略】……

第七字頭は as, ……【以下略】……

第八字頭は at, ……【以下略】……

第九字頭は ab, ……【以下略】……

第十字頭は ao, ……【以下略】……

第十一字頭は al, ……【以下略】……

第十二字頭は am, ……【以下略】……

中村：第一字頭内の文字の配列順は、メレンドルフの文字表と“ほぼ”同じです。直接に十二字頭に依ったものか、他の研究者をとおして間接的に十二字頭に依ったものか、課題ではありますが、メレンドルフの文字の順番の淵源が十二字頭にあることは確かです。

しかし、両者は k, g, h の配置が異なります。十二字頭は、a, o, ū の上の［ㄔ］k 等と、e, i, u の上の［ㄅ］k 等の位置を離して配置しますが、メレンドルフはまとめて配置します。十二字頭に依りながら、なぜこのように子音の配置が異なるのか問題となりそうです。

吉池：メレンドルフは、伝統的な十二字頭の配列順よりながらも、［ㄔ］等と［ㄅ］等については一緒に配置した方がわかり易いと考えたのでしょうね。

中村：たしかに［ㄔ］等と［ㄅ］等を一緒に配置したほうが、表の構造という点からみると理解しやすい。それはいいとして、そもそも十二字頭はなぜ両者を離して配置したのでしょう。何か理由があるはずです。

吉池：先に挙げた第一字頭の中にある音節をみると、いま問題としている子音は次のような配列となっています。a, o, ū の上の k 等と、e, i, u の上の k 等に下線（単線）を付します。外国借音（中国語）用の文字にも下線（波線）を付します。

……, ka, ga, ha, ko, go, ho, kū, gū, hū, ……, ke, ge, he, ki, gi, hi, ku, gu, hu, ka, ga, ha, ko, go, ho, ……

中村：下線（単線）を引いた a, o, ū の上の k 等と、e, i, u の上の k 等が離れて置かれていることは先に確認したとおりですが、e, i, u の上の k 等と外国借音の ka, ga, ha, ko, go, ho が一緒に置かれていることが気になりますね。

吉池：e, i, u の上の k 等と外国借音の k̑ 等の子音は同類の音であったため隣に置いたが、a, o, ū の上の k 等の子音の音とは異なっていたため、離して置いたということでしょう。

中村：g, k, h など、喉音の調音方法の相違を、音節の配列順に反映させることは漢語にもみられます②。満洲語の十二字頭の配列順にも類似の反映があってもそれほど奇異ではありません。現代のアルタイ諸語の発音からみて、a, o, ū の上の k 等の子音は“概略な音声”としては喉の奥よりで発音する［q, ɢ, h］で、e, i, u の上の k 等と外国借音の k̑ 等の子音は“概略な音声”としては喉の前寄りで発音する［k, g, x］であったということについては前回の「満洲文字の文字表をめぐって(1)」で確認しました③。

吉池：そうでしたね。その点にかかわる前回の議論において、河内良弘(1996)『満洲語文語文典』④にある烏拉熙春氏の考えに言及すべきでした。いま注に挙げます⑤。さて、両者には

---

② 切韻系韻書の韻目の配列において、音節末子音-ŋ（満洲語の ng に相当）を持つ韻が離れて二カ所に出る。これについて、一方は-ŋʷ（もしくは口蓋垂音-ɴ）、他方は-ŋ との解釈が賴惟勤(1953)によってなされ、現在ではほぼ定説となっている。賴惟勤(1953)「上古中国語の喉音韻尾について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 3 巻。『賴惟勤著作集 Ⅰ 中国音韻論集』139-154 頁、汲古書院、1989 年所収による。

③ 母音 a, o の上の満洲語を表記する文字と漢語を表記する文字は異なるものが使われ、母音 e, i, u の上の満洲語を表記する文字と漢語を表記する文字には同じものが使われる。a, o の前の満洲語子音と漢語子音は異なっているが、e, i, u の前の満洲語子音と漢語子音は同じものであると認識しており、a, o の前の満洲語子音と漢語子音の違いを明示するために新たに ᡴ̑ 等【脚注では横書きの満洲字フォントとする。以下同様】の文字を作ったと理解することができる。そうであるならば、ᡵ 等が喉の奥よりで発音する［q］等で、ᡴ 等 ᡴ̑ 等は［q］よりも前寄りの［k］等であったとするのが穏当であろう。

④ 河内良弘(1996)『満洲語文語文典』京都大学学術出版会。助編者は清瀬義三郎則府、愛新覚羅 烏拉熙春　両氏。

⑤ 【脚注では横書きの満洲字フォントとする】「ᡴ, ᡴ́, ᡴ̊ と ᡵ, ᡵ́, ᡵ̊ との音価は同じでない．ᡴ, ᡴ́, ᡴ̊ の音は軟口蓋音すなわち［k‘a］,［ka］,［xa］であり，漢語の軟口蓋音の発音部位と同じである．ᡵ, ᡵ́, ᡵ̊ の音は，口蓋垂音，すなわち［q‘a］,［qa］,［χa］であり，漢語の卡，嘎，哈の発音部位とは異なっている．」「ᡴ, ᡴ́, ᡴ̊ と ᡴ, ᡴ́, ᡴ̊ との機能は異なる．満洲語にも一組の軟口蓋音，すなわち［k‘e］(ᡴᡝ),［ke］(ᡴᡝ́),［xe］(ᡴᡝ̊)がある．しかしそれらと接続する母音と，ᡴ, ᡴ́, ᡴ̊ が接続する母音とは音価が異なる．ᡴ, ᡴ́, ᡴ̊ は陰性母音と中性母音（e, u, i）とのみ接続し，ᡴ, ᡴ́, ᡴ̊ は陽性母音 a, o とのみ接続する．漢語中には陽性の u 母音の変異音［ụ］を表示する語がないので，ᡴ, ᡴ́, ᡴ̊ を一組とする字母の機能は，ただ a, o 二つの母音にのみ接続することに限られている。それゆえ，達海が ᡴ, ᡴ́, ᡴ̊ の字母を創製した意図は明らかである．満洲語 ᡴ, ᡴ́, ᡴ̊ の子音発音と，漢語“客[ke]，哥[ge]，喝[he]”【音声記号に囲まれているがこれはピンイン表記：対談者注記】の子音の発音とは相等しい．ただし ᡵ, ᡵ́, ᡵ̊ の発音は漢語とは異なる．このため外来語（漢語）をはっきりと写すためには文字上に区別を設ける必要に迫られた．このゆえに達海は，満洲語になく，漢語に特有の

音の違いがあり、そのような違いを十二字頭の作成者（おそらく満洲人）は意識していたため、両者を離して配置したということであるならば、十二字頭としてはそれなりの理由があったということですね。メレンドルフ(1892)はそれにもかかわらず、意図して十二字頭には従わず、a, o, ū の上の k 等の喉の奥よりで発音する［q, ɢ, h］と、e, i, u の上の k 等の喉の前よりで発音する［k, g, x］を隣接させて配置した[⑥]。

中村：a, o, ū の上の［ᡤᡳ］等と、e, i, u の上の［ᡴᡳ］等を、実用的なローマ字翻字として一つの k 等で表記したのは、後続する母音の違いによって字形を区別することができたことによるものです。後続する母音の違いを明瞭に示すには、十二字頭のように両者を離して配置するよりも、一緒に配置した方がよいとのメレンドルフの判断があったものと推測します。

吉池：このような部分を含む文字表が後代に影響を及ぼしたわけですが、日本の研究者はどのように受け止めたのか確認しましょう。

メレンドルフと池上 1955

中村：日本に目を転ずると比較的に早い時期の文字表に池上二郎(1955)があります。これもメレンドルフ(1892)の文字表とローマ字翻字に基づいたものです。池上氏の文字表は市川三喜・服部四郎編『世界言語概説』下巻（1955 年）「トゥングース語」462 頁-464 頁に掲載されており、メレンドルフの文字表の体裁を受け継いでいますが、メレンドルフよりもだいぶ細密になっています。以下、この文字表を池上 1955 もしくは単に 1955 と呼ぶことにします。池上 1955 をみると、a, o, ū の上の k 等と、e, i, u の上の k 等は伝統的な十二字頭に従い離して配置してます。この点だけはメレンドルフ(1892)の文字表と異なっています。

吉池：池上 1955 はメレンドルフには従わず、十二字頭の配列順に従って［ᡤᡳ］等と［ᡴᡳ］等を離して配置したわけですが、このことは理に適っているのでしょうか。

中村：もしも文字表において、十二字頭のように e, i, u の上の k 等と外国借音の ḱ 等とを一緒に置くならば、a, o, ū の上の k 等の子音と離して配置することに理由を見出すことができます。しかし、メレンドルフの文字表は、外国借音の ḱ 等を e, i, u の上の k 等と切り離

［k‘a］，［k‘o］，［ka］，［ko］，［xa］，［xo］を写すために，［ᡴᠠ］，［ᡴᠣ］，［ᡧᠠ］の一組の字母を創製したのである［烏拉熙春］.」(57-58 頁)。なお、引用文では、語頭の k, g, h(e, i, u の上)と ke, ge, he を、［ᡴᡝ］，［ᡤᡝ］，［ᡥᡝ］と［ᡴᡳ］，［ᡤᡳ］，［ᡥᡳ］で表記し分ける。

⑥ 喉で発音する音について、我々は簡略的に［q, ɢ, h］としたが、烏拉熙春氏は［q‘, q, χ］とする。池上二郎(1955)（『世界言語概説』）は［q̇, ɢ̣, h］とする。これは満洲語の音声（および音韻）がいかなるものであったかという解釈の問題であるが、音声の問題については後の対談で詳しく論じたい。

して別に配置するわけですから、すでに a,o,ū の上の k 等と e,i,u の上の k 等を離して配置する理由はありません。そうであるならば、a,o,ū の上の k 等と e,i,u の上の k 等を一緒に置いたメレンドルフの文字表の配置にも理が有るということになります。

ところでちかごろ、吉池孝一(2022)で満洲文字を文字表にまとめましたね[⑦]。そこではこの問題をどのように扱ったのですか。

吉池：吉池 2022 は Windows のフォントを使用して作成したものです。内容は“ほぼ”同様で、池上 1955 の文字表とそれに付された池上氏の注記を合わせて作成したものですが、a,o,ū の上の k 等と e,i,u の上の k 等の位置については池上 1955 には従わず、メレンドルフに従って [ᡳ] 等と [ᡴ] 等をまとめて配置しました。

各種文字表

中村：たしか似たような文字表をほかでも見ましたが。

吉池：都立大の関係者は、1993 年の東京都立大学の落合守和先生の講義で配布された表を持っているのではないでしょうか[⑧]。私はすでに他大学に就職していたのですが、講義に参加させてもらいました。この文字表は、池上氏の文字表に、それに付された注記の情報を書き入れたもので、使い勝手が良く、私はこれ以後ずっとこの表を利用しています。以下、この表を 1993 とします。

中村：池上氏の文字表は、表と注記が別々に書かれており、表自体も簡潔に過ぎて、入門をする者にとっては、ややハードルが高いでしょうか。

そのほかに、池上氏の文字表を利用したものとしては、津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20 講』（大学書林）所収の表(18 頁～22 頁)がありますね。これを 2002 と呼びましょうか。

吉池：津曲氏の文字表も、池上氏の文字表に、池上氏の注記を簡潔に書き込んだものです。文字自体の配置も変えており、見やすくなっています。吉池 2022 の文字表は、1955 に依り、1993 と 2002 を参照して作成したものなので、[ᡳ] 等と [ᡴ] 等の位置以外は、四者は根本において異なるところはありません。

中村：[ᡳ] 等と [ᡴ] 等の位置は別として、それ以外に吉池 2022 は、どの点が 1955、1993、2002 と異なるのでしょう。

---

⑦ 吉池孝一(2022)「満洲字の文字表」『KOTONOHA』第 235 号（2022 年 6 月）、1-7 頁。

⑧ 1993 年講義資料の文字表が、いつ頃から使用されていたかの詳細は知らない。

吉池：本文字表を作成するにあたって、入門する者にとってわかり易いようにとの配慮はしたつもりです。具体的には、文字の配置をやや整理し、表中の注記の表現を変えました。また先に述べたように、Microsoft Windows の Mongolian Baiti に収めるフォントを利用した点は前三者と大きく異なります。

中村：吉池 2022 の文字表はだいぶ見やすくなりましたが、簡潔な池上氏の注記によっているので、やはり説明が省かれていると感ずる点が少なくありません。とくに子音と母音のつながりです。満洲文字には、男性語用と女性語用[9]の子音があって、字形が異なるのですが、それと母音が結合するときに、母音の字形も異なる場合があります。その点について、この表だけですと理解が困難です。

吉池：そのとおりです。

中村：河内良弘(1996)『満洲語文語文典』には文字についての詳細な解説があり、これを参照するならば、説明が省かれている点を補うことができます。また河内 1996 は、文字の説明にあたり豊富な語例を出しており、文字使用の理解を助けてくれます。[ᡳᡴᡳ] 等と [ᡴᡳᡴᡳ] 等の位置についてもメレンドルフと同様です。この書があれば入門者にとって十分だと思うのですが、なぜ今新たに池上二郎氏の文字表に依ったものを作る必要があるのでしょうか。

吉池：入門する者にとって使い勝手が良いかどうか。それは、満洲語文語を読む目的にもよるのでしょう。言語の専門家ではなく、歴史を研究する者、将来言語の研究を志す者にとって使い易いものとしたいと考えています。その点、河内 1996 は詳しく有用なのですがややハードルが高いように思います。①手軽な文字表を手にして、②満洲語文語をローマ字に直し、次いで③辞書で意味を調べる、という作業に資する簡便な文字表があってもいいのではないかと思っています。

中村：河内 1996 の後に出た津曲 2002 も、池上二郎氏の文字表をほぼ踏襲しているので、池上氏の文字表は入門書にとって便利であるとみているのでしょうね。

吉池：それと、もう一つ理由があります。満洲語文語の入門には、満洲文字の理解が第一歩であり、最大の難関でもあります。その難関を突破するために、満洲文字に関する対談をおこなって、入門する者が突き当たるさまざまな問題を話し合いたいと考えています。そのた

---

[9] 男性母音（a, o, ū）と女性母音（e）はふつう同一単語の中で混用されない。男性母音を使用する単語を便宜的に男性語、女性母音を使用する単語を女性語と呼ぶことにする。

めに、まず対談の種として利用しやすい文字表を作ったという次第です。この文字表をもとに話し合い、入門する者にとって、より使い易い表に改良することができれば幸いです。

Windows のフォント

中村：ところで、「対談の種」としてのこの文字表は、Windows の Mongolian Baiti に収めるフォントを利用したということですが、フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』に収める文字表も Windows のフォントを利用してますね。このフォント、使い勝手はどうでしょうか。

吉池：横書きの文章のなかで横書きの文とともに利用する場合は、本文字表の“初頭の字形”（中間、末尾、単独の字形が出ているが、初頭の字形でよい）をコピーして貼り合わせると満洲語を綴ることができます。例えば、ᡥᡳᠣᡵᡠᡨᡳ（niorumbi「心がしびれる」）のようになります。

中村：吉池 2022 の文字表は PDF ファイルですが、問題はないのですか。

吉池：問題はありません。コピーをして貼り付けることができます。

中村：横書き文章のなかに、縦書きの満洲語を提示する場合の簡便な方法はありませんか。

吉池：Word の左上「挿入」→「図形」→「縦書きテキストボックス」として、縦書きテキストボックスを作成した後、本文字表の“初頭の字形”をコピーして順次貼り合わせることによって、簡便に縦書きの満洲語を綴ることができます。例えば下記のとおりです。

niorumbi

中村：縦書きテキストボックスはコピーをして貼り付ければ簡便に利用できますね。

吉池：本文字表のフォントは ᡳ のようにすべて枠で囲まれていますが、縦書きテキストボックスをコピーして貼り付けフォントを付したものです。

中村：ところで、niorumbi の語末の母音 i に相当する満洲文字のフォントは ᡳ ですが、これは子音文字 b, p, k, g, h の下における母音 i ですね。1955、1993、2002 の b, p, k, g, h の下における母音 i の字形は ᠣ を小さくしたものであり、Windows フォントの ᡳ とは字形がやや異なるという印象がありますが。

吉池：Windows のフォントには、実際の満洲文字と字形が異なるものがあるので承知をしておく必要がありそうですね。

中村：吉池 2022 をみると、「1955、1993、2002 にあって、Windows のフォントに無いものがある。また、1955、1993、2002 にも Windows のフォントにもあるが、単独の文字として Windows のフォントから取り出せない文字もある。」とあります。これはどういうことでしょう。

吉池：その点は文字表を見ながら確認しましょう。

文字表（母音部分）

吉池：吉池 2022 の文字表の母音部分は次のとおりです。

表 3. Windows フォントによる文字表

■母音

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形	単独の字形
a[ɑ]				
			b, p, k̑, g̑, ḣの下	
e[ə]				
		t, d, k, g, h の下	t, d の下	
			b, p の下 *	
			k, g, h の下	
i[i]		子音の下		
		母音の下	b, p, k, g, h の下	* 名詞語尾
		母音の下 *		

※i の中間字形の「母音の下」には両形があるが、これは文献による異なりであるという。単独字形に「名詞語尾」と付記したものは、名詞語尾 i が語幹から離されて書かれた場合の字形である。

o[o]			単音節末尾 b, p, k̑, g̑, ḣの下	
			多音節末尾 母音の下	

u[u]

単音節末尾 b, p の下 *

t, d, k, g, h の下

多音節末尾

t, d の下で単音節末尾 k, g, h の下

t, d の下で多音節末尾

※o の末尾の注記「単音節末尾　b, p, ḱ, ǵ, ḥの下」は「単字の末尾で。ただし b, p, ḱ, ǵ, ḥの下でしかも末尾ではすべてこの字形」の略記。u の末尾の注記「t, d の下で単音節末尾　k, g, h の下」は「t, d の下で且単字の末尾における特別の字形。なほまた k, g, h の下でしかも末尾ではすべてこの字形」の略記。両者は注記の表現が異なる。他もこれに準じる。

ū[o, u]

中村：「表 3. Windows フォントによる文字表」には＊が 4 カ所に付されたフォントがあります。これらが Windows のフォントから取り出せないものですね。

吉池：いろいろ工夫をしてみたのですが、これらのフォントは取り出せないため、作字して画像としてはりつけました。

中村：フォントを貼り合わせて満洲文字の単語を表記しようとする場合、この 4 つのフォントについては、画像である以上、コピーをして貼り合わせて利用することはできませんね。当然のことですが、フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』に収める文字表は Windows のフォントを利用しているので、表にこれらの文字は無いということでしょうか。

吉池：そういうことです。以上で文字表をめぐる基本的な事項の検討は一段落しました。今後の議論の仕方ですが、どのような手順ですすめましょうか。

今後の議論

中村：論じる内容は、

ａ．字形と構造に関する問題

ｂ．音価の問題

ｃ．漢語用の字形の問題

ｄ．翻字・転写の問題

などに分けられるかと思いますが、おそらく「ａ」から取り組むのがよいのでしょう。

具体的には、思いつくだけでも次のようなものがあります。

ａ－１．語頭形、語中形、語末形、単独形。

ａ－２．母音調和と子音（k/g/h、t/d）

ａ－３．印刷体と筆記体、書き順など
ａ－４．無圏点と有圏点

吉池：それでは文字表の母音部分に依って「a-1」から検討を始めましょう。

位置による字形の異なり

中村：満洲文字は、単語の初頭にあるか中間にあるか末尾にあるか、それとも単独であるかによって、字形が異なります。

ソグド文字は、改良されながら西から東に伝わり、ウイグル文字、モンゴル文字、満洲文字となったとされますが、いずれの文字も、単語のなかの位置によって、語頭形、語中形、語末形、単独形の違いがあります。このような単語のなかの位置による字形の異なりはソグド文字以前に遡るのかどうか気になりますね。

吉池：西田龍雄(1981)「世界の文字」[⑩]（『世界の文字』）には文字の系統図があり、その一部を見ると、「エジプト文字→古シナイ文字→フェニキア文字→アラム文字→シリア文字→ソグド文字→ウイグル文字→蒙古文字」とあります。蒙古文字の次に満洲文字が来ることは問題ないですね。

伴　康哉(1981)「シリア系文字の発展」（『世界の文字』）によると、シリア文字の書体には、エストランゲロ書体とそれから分かれ出たネストリアン書体とセルトー書体の三種類があり、そのうちセルトー書体では語頭、語中、語末の字形の区別が著しくなったとあります[⑪]。

中村：そうすると、仮に、まずセルトー書体で語の位置による字形の区別が著しくなったとする説を受け入れるとして、それが東に広がるネストリウス派キリスト教徒のネストリアン書体に影響し、そこから伝わったという可能性もある[⑫]。たしかシリア文字が刻された碑文の拓本、古代文字資料館にありましたね。

---

⑩ 西田龍雄(1981)「世界の文字」『世界の文字』大修館書店、5-41 頁。28 頁に系統図がある。

⑪ 「シリア文字の書体には三種類ある。エストランゲロ，ネストリアン，セルトーがそれである。」(148 頁)。「最古の，あるいは初期の，シリア文字は二三の刻文によって知られているが，直接エストランゲロへと発達したことは明らかである。シリア語の単語は初期から文字を連結して綴られていた。エストランゲロでは字母Ｋ，Ｍ，Ｎに，それぞれの特殊な語末形が発生した。エストランゲロからネストリアンとセルトーが分かれ出たが，特にセルトーでは，語頭，語中，語末の字形の区別が一層著しくなった。」(150 頁)。
伴　康哉(1981)「シリア系文字の発展」『世界の文字』大修館書店、139-158 頁。

⑫ 松田伊作(2001)「シリア文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』511-514 に「Syria という名称はギリシアのものであるから，シリア語では「シリア文字」といわず，書体によって 3 種に呼び分ける。すなわち，最古の書体たるエストランゲロ体（シリア語で’esṭrangelā

大秦景教流行中国碑

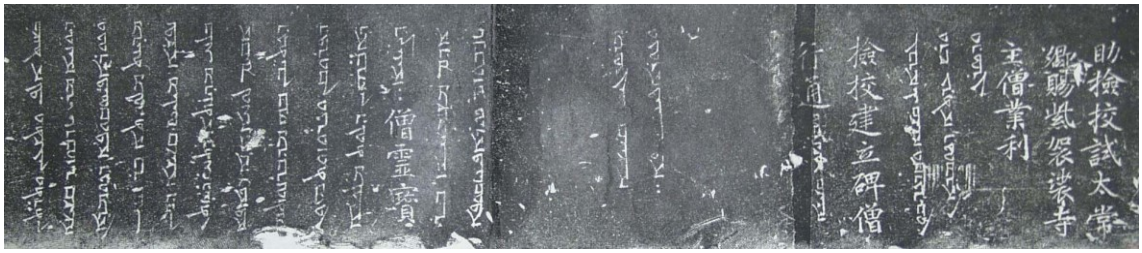
吉池：漢語とシリア文字・シリア語が合璧となった「大秦景教流行中国碑」の拓本があります。碑石は西安の碑林に現存するようです。漢文をみると、唐代の徳宗の建中二年（781）建立で、景淨撰、呂秀厳正書とあります。景教（キリスト教ネストリウス派）の教義と中国における布教の状況が記されています[⑬]。碑額と碑身を合わせると 236cm の大きな碑文で、下部と側面にシリア文字・シリア語と漢語が混じった文が刻されています。

拓本上半分

—ā はのちに ō に変化した—，ギリシア語 στρογγύλη「丸い」からの借用という説が有力だが，確証はない.)，のちにこれから変化し，西方シリア人（ヤコブ派キリスト教徒）に用いられた西方書体またはセルトー体（シリア語で serṭā/ō「線，文字」)，および，東方ネストリウス派キリスト教徒の間で変容した東方書体またはネストリウス体（シリア語で nestūryānā/ō）の 3 種である」(511 頁）参照。

⑬ 刻字は正面と左右の側面の三箇所にある。本拓本は正面と 側面(右)のみ。京都大学人文科学研究所の拓本中に側面(左) が有り、側面(右)が無い故、互いに補完し得る。

正面の左端一行と右端一行、及び最下部にシリア文字シリア語がある。左右の側面にもシリア文字と漢字により人名が刻されている。なお、側面(右)の下半分に隷書で「民国六年二月・・・李根源題」とあるが、これは民国六年(1917 年)に碑林を訪れた李根源という人物が題記を刻したもの。拓本資料の基本情報は次のとおり。行数と字数：正面の碑額は 3 行各行 3 字。正文は 32 行各行 62 字。大きさ：正面の碑額は縦 49cm、横 33cm。碑身は縦 187cm、横(上)89.5cm/横(下)94.5cm。右側面は縦 138.5cm、横(上)24.5cm/横(下)25.5cm。



拓本下部

吉池 : 先ほどの、語の位置による字形の異なりの淵源がネストリアン書体にあるかもしれないという話、話としてはおもしろいのですが、どうでしょうか。ソグド文字以降についてはある程度実感をもてますが、それ以前については、文字の系統についても、語の位置による字形の異なりについても、どちらも実物の資料に拠って確認し、納得をしたわけではないので、わたしにはよく分かりません。

中村 : 語の位置による字形の異なりの淵源については、だいぶ後代の資料ではありますが、取っ掛かりとし得る拓本資料もあるので、今後の課題ということにしましょう。今回はこれまでとし、次回は満洲文字自体によって、語の位置による字形の異なりについて検討しましょう。